

名劇場の陰 抑留の歴史



世界発

2014

14.5/30 A

ウズベキスタン 保存へ改修



大改修が進むナボイ劇場＝タシケント、金成隆一撮影

中央アジアのウズベキスタンで、第2次世界大戦後に日本人抑留者も加わって建てられたバレエ劇場の大改修が進んでいる。国を代表する劇場を後世に残そうとの試みで、今秋にも完了する予定だ。劇場建設の歴史を振り返ると、歴史に埋もれた日本人抑留者の貢献が浮かび上がる。

「日本人貢献」プレートに

首都タシケント中心部の官庁街に、ウズベキスタン最高級の「ナボイ劇場」がある。1400人を収容できるれんが造りの重厚な建物で、モスクワのレーニン廟の設計で知られる建築家シューセフが手がけた。

記者が4月中旬に訪れた際、劇場は高さ約2層の塀に囲われ、外壁には壁面修復用の足場が組まれていた。傷んだれんがを取り換えたり、正面の扉や窓ガラスを新調したりしているようだった。

塀の内側で作業着を手洗



いしていた男性作業員に声をかけると、男性は「トウキョウ？ おお日本人か」と笑顔になり、劇場を指さしながら片言の英語で「修復はうまくいっているよ」と胸を張った。男性の近くには、新しいれんがが山積みになっていた。

1940年代に建てられたナボイ劇場は、日本と深い関係がある。戦後に旧ソ連の捕虜となり、旧満州からウズベキスタンまで連行された約400人の日本人抑留者が建設に携わったとされる。劇場の壁面には、「数百人の日本国民が劇場の完成に貢献した」と記されたプレートがはめ込まれている。

タシケント市内の金融業界で働く男性(55)は「劇場建設で日本人抑留者が貢献したという話は祖母から母親へ、母親から僕へと伝わった」と話した。66年の大地震で市内の多くの建物が倒壊したが、劇場は被災者の避難所になるほど頑丈だった。この時、日本人抑留者たちの仕事ぶりが改めて注目されたという。

国営観光会社ウズベクツールイズムのファルウ・リザエフ総裁は「ナボイ劇場の今回の修復は、20〜30年に一度の規模だ。劇場を後世に残したい」と話す。改修は今秋にも終わり、オペラやバレエなどの上演を再開する予定だ。

絶望に耐え2年半「日劇に匹敵」



劇場建設を振り返る大塚武さん。手にしているのは、ウズベキスタン人の同僚がくれた手作りのたばこケース

ナボイ劇場の建設に携わった元抑留者の1人と東京で会うことができた。世田谷区在住の不動産仲介業、大塚武さん(88)だ。「れんが焼き数百個のノルマを達成できず、ソ連人の監督に『ダバイ、ダバイ』(ロシア語で『やれ、やれ』の意味)とせかされた」と当時を振り返る。

45年の終戦時、現在の中国遼寧省にあった旧日本陸軍の鞍山飛行場第四航空路部の通信兵だった。「内地に帰れるぞ」。期待と裏腹に、大塚さんら日本兵を乗せた貨物列車は北のシベリアへ、そして西へと向かった。一人でも多く詰め込むため、貨車では数十人が頭と足を互い違いになるようにして寝た。シラミや南京虫に襲われて寝つけない。バイカル湖が見えた時、しばらくは帰郷できないと悟ったという。

出発から約40日後、タシケントで降ろされ、鉄条網に囲われた第8ラゲリ(収容所)でれんが製造を命じられた。劇場の壁面になるれんがだった。数カ月後、劇場建設を担う第4ラゲリに移動。配電担当となり、劇場の1〜3階に電線を敷いた。電線に頭が触れて感電し、半日ほど意識不明になったこともある。地元の医師が汗びっしょりになり、心臓マッサージをしてくれて一命を取り留めた。建設中の事故で死亡した仲間もいた。

いつ帰れるか分からない絶望感と劣悪な労働環境にありながら、仲間とは「仕事をしっかりとやろう」と声を掛け合った。日本人の働きぶりは評判で、地元民から魚の干物やウオツカなどの差し入れのほか、結婚の申し出まであったという。ソ連側は一人ひとりの食事をノルマ達成度で増減したが、抑留者たちで分け直して「平等」を貫いた。抑留者の食事は総量は決まっている。奪い合えば仲たがいが起きるだけだと、皆で決めた。

タシケント市内に日本人抑留者が79人が眠るヤッカサライ墓地がある。ウズベキスタン国内にある13カ所の日本人墓地の一つだ。管理人のラーノ・アリブハジエイエバさん(60)は「多くの日本人観光客が訪れる。私はこの国への日本人の貢献を知り、尊敬の気持ちを込めて仕事をしたい」と話した。

第2次大戦末期にソ連が日ソ中立条約を破棄して旧満州などに侵攻。日本兵らをシベリアなどに連行して過酷な労働を強いた。日本の厚生労働省の社会・援護局調査資料室によ

ると、旧ソ連での抑留者は推計で約56万1千人、抑留中の死亡者は約5万3千人に上る。抑留者のうち約2万3千人がウズベキスタン(91年独立)に連行され、劇場建設のほか運河やダム、水力発電所の建設以外に、炭鉱や農業などにも従事した。推定約900人が栄養失調や病気などで死亡。日本の外務省によると、ウズベキスタンは気候が比較的温暖なことなどから、抑留中の死亡率はシベリアの半分以下で約4%だったという。

2年半に及ぶ抑留生活を終えて48年夏、京都府の舞鶴港に帰国した。「若い頃に見聞を広げることができた。強制労働とはいえ、今も地元民に大切にされる劇場建設にも携われた。抑留者の中では幸せな部類だったのではないか」ウズベキスタン人の同僚がくれた手作りのたばこケースを、今も大切にしている。ナボイ劇場で見たバレエが帰還後も忘れられず、娘3人をバレエ教室に通わせた。異国での体験は、その後の大塚さんの生活に大きな影響を与えた。

建設・炭鉱・農業に従事 推定900人が死亡

と、旧ソ連での抑留者は推計で約56万1千人、抑留中の死亡者は約5万3千人に上る。抑留者のうち約2万3千人がウズベキスタン(91年独立)に連行され、劇場建設のほか運河やダム、水力発電所の建設以外に、炭鉱や農業などにも従事した。推定約900人が栄養失調や病気などで死亡。日本の外務省によると、ウズベキスタンは気候が比較的温暖なことなどから、抑留中の死亡率はシベリアの半分以下で約4%だったという。